

サンダル履きまま旅

13

◇素朴なタイやラオスの田舎町◇

寺井融

Terai Toru

今は昔の一九八二年のバンコク
三輪自転車がタクシー代わり

タイといえば、一九八二年の九月を思い出す。一週間、バンコクのY M C Aホテルに滞在し、街を歩きまわったのだ。まだ、バンコクの空港も東南アジアの香りがする素朴なもので、高い天井にはファンが舞っていた。いまの東南アジア有数のハブ空港・バンコク国際空港とは、規模も異なれば、利用客数のケタも違う。

町を歩けば、前に一輪、後ろに二輪の三輪自動車、日本でいえば昭和三十年代に活躍したミゼットみたいなトウクトウクが、タクシーの役割を果たしてくれていた。ハッポン通りから宿まで「一

バーツ（タイの通貨）は、何円だったかな」と頭をめぐらせながら、代金を交渉したことを想い出す。

当時、スカイトレイン（高架鉄道）も地下鉄も、さらに冷房タクシーやバスも走っておらず、乗り合いバスとトウクトウク、さらにモトハイ（バイク・タクシー）が庶民、否、観光客も、足であったのである。

飲んだ後に必ず寄った屋台
タイスキ店は有楽町にも出店

バンコクで、一番はじめに魅了したのは、屋台麵である。江戸時代の二八そば屋もかくやと思わせる小ぶりの屋台で、小ドンプリに入れられた黄



バンコク市中心部で仏像にお参りする人々

色の麵。サッパリしたスープが食欲をそそる。汁の味の補強にはナンプラー（漁醬）や味の素、それに塩や砂糖も入れ、柑橘系の汁も絞って加える。太いモヤシや小さな唐辛子の輪切りも入れた。客がお好みの味に調整するのが気に入った。飲んだ後に「こりや太るわな」と後悔しつつ、必ず寄った。石焼きの海老や蟹に感激し、ちよつと酸味のある名物スープ、トムヤンクンが毎夕の友となった。コカレストランで食べたタイスキにも驚いた。スープが入った鍋に魚、肉、野菜、豆腐や練り物などを、赤ちゃんの拳ほどの網に入れて、煮ると

いうよりチャチャと湯をくぐらせように浸してから食す。スープをレンジでとって、ナンプラーをたらしでタレにすればよい。タイのスキヤキというより、シヤブシヤブに近い。コカは有名なレストランとなり、各国に出店するようになった。東京では有楽町にある。

さらに、ジンギスカン鍋のごとく、兜を裏返したような鉄鍋の上部で肉などを焼き、鍋のへりにはスープを張っていて、野菜などを煮るといった鍋料理も登場している。

定番のタイ式のオムレッツやグリーン・カレーも食べやすく、ヘルシーで美味である。日タイどちらでも、よく食べている。

片道5時間の難民キャンプ視察 大皿に盛られた鳩の頭を囓る

カンボジアとの国境の町、アランヤプラテートで、町の定食屋に入った。同行の篠原勝弘在タイ一等書記官(当時)は、ショークースをのぞいて魚や肉、野菜を指差し、料理法を指定した。ものの三分たつて出てきたアツアツを、フウフウいながらガツつく。ただ炒めただけなのに、どこに魔法をかけたのかと思われるほどの美味であり、車で片道五時間かけての国連難民キャンプ視察だったが、疲れがいつべんにとれた。

ある昼食会でのこと、「これから、とっておきを出します」と言われて、出てきた一皿を見た一同はビックリ。鳩の頭の部分が、大皿を一周して

いる。絞首刑となった首級をながめているようなもので、くちばしをつかんで小さな頭をかじる。香ばしく、歯ごたえもあり、地元のビールにもあつた。

その後、何度もバンコクを訪れたが、再度お目にかかっている。最近、タイ料理ファンも増えているが、食べているのかしらん？

お奨めは古都チェンマイ 足を伸ばして隣のラオスへ

タイ観光旅行といえ、アユタヤやスコータイ



チェンマイのマーケット

といった仏教遺跡、ブーケットやサムイなどの島やホアヒン、パタヤなどのビーチが、有名である。だが、本当の良さを知るためには、誰にも知られていないような田舎町でノンビリすること。安ホテルを根城のブラブラ歩きが、日本でのせわしい時間を忘れてくれるし、美味しいものにもあつつける。

そこまで度胸がない人は、まずチェンマイ行きをお薦めしたい。タイ第二の都市である。古都の掘り割りある町並みが、バンコクにない落ち着きを感じさせてくれる。郊外には温泉もあり、日本人の長期滞在者の多い都市で、日本書籍や食べ物売っている店もあつた。

そうは言っても、タイは地方都市に行っても、コンピニがあつたりして、かなり近代化されてきた。それに、ご不満の向きには、お隣のラオスに足を伸ばしたらよい。

ラオスのビエンチャンは、「信号のない首都」と、有名旅行作家にからかわれたが、もちろんそのようなことはない。信号機も何か所で見かけた。しかし、ほかの東南アジアの国々の首都、いや州都に比べても、はるかに信号は少ないのかもしれない。ここ何年か行っていないので、はっきり断言できないが、車の交通量は格段に少なかったはず。

人通りまばらなビエンチャン 人気の旧王都ルアンバハーン

ラオスは、本州ほどの国土に人口は六百万余で

あるから、人口密度はASEANの中でも際立って少ない。ビエンチャンの町で、まばらな人通りを眺めると、シャッター通りと言われる日本の地方都市みたいだ、と思った。

だが、それも一歩、首都を離れて赤土の大地を走ると、自然たつぷりな風景に圧倒される。郊外の動物園には白い像がいて、縁起のいい動物として大事にされているし、山の中の井戸では、地下水(塩水)を汲み上げて、煮詰めて塩を作っている。



井戸水を煮つめて塩をつくる(ビエンチャン郊外)

さらに、ビエンチャンから飛行機で一時間北に飛ぶと、旧王都・ルアンバハーンがある。フランス人やイタリア人が大好きな町で、町のカフェには彼の国の若者がたむろしている。

町の中央に博物館がある。旧王宮で、「日本で

いえば町の児童公園ほどのスペースに、ちよつと立派なお寺が建っているみたいなもの」

(拙著『サンダル履き週末旅行』竹内書店新社)だった。博物館の前に

小山がある。登ると町が一望できる。寺院があり、市場が見える。メコンの大河がゆつたりと流れており、夕焼けが感傷的にさせてく

れる。

お坊さんが多い町だ。朝まだき、黄色の僧衣をまとった托鉢僧の列が長く続く。王家の地だけあって、旧王族が経営しているホテルもある。そのサンテイホテルでは、フロアリングの上に直接座り、お膳で食するラオス伝統料理コースが、売り物となっている。レストランの照明は暗い。一碗ごとに工夫をこらした味。旧家での箱膳での食事みたいで楽しい。



メコン川上流には、バクオ洞窟 底抜けの明るさの子供たち

ルアンバハーンのメコン川上流三十キロには、バ

少数民族の土産売り (ラオス)

クオ洞窟があり、何千という仏像が安置されている。また、タワンシーの滝も、見所の一つだ。

ラオス観光の見所といえば、南ラオスのワット・プー(古代ヒンズー教寺院の遺跡)やカンボジア国境近くのメ



のどかなルアンバハーン市内

コン川の島、コーン島周辺であろう。大小の島々や瀆がある。

自然遺産ともいうべき風光明媚な地を訪ねるのも、旅の楽しみだが、タイやラオスの田舎には、底抜けの明るさの子供たちや、はにかみながらも世話を焼いてくれる素朴な大人たちがいるのだ。タイ語とラオス語の間には、津軽弁と鹿兒島弁の差ほどもないと聞いた。

■てらいとおる 昭和22年北海道生まれ。46年、中大法卒。雑誌編集者、新聞記者を経て現在、尚美学園大学非常勤講師、ロングステイ財団広報委員、日本旅行作家協会会員。『サンダル履き週末旅行』(竹内書店新社)をはじめとする旅行記のほか、エッセイ『裏方物語』(時評社)がある。